

非造影 MRA を考える ～まずは、TOF 法と PC 法から～

座長 青森市民病院
古山 智明

近年 MSCT の多列化や Gd 造影剤による NSF（腎性全身性線維症）の問題、経営的側面からの DPC などにより、非造影 MRA が注目されている。

非造影 MRA は、古くから Time-of-Flight(TOF)法や Phase contrast(PC)法があり、頭頸部領域を中心に重要な撮像法として多くの施設で行われている。また、最近では FBI(Fresh blood imaging)（東芝）をはじめとする 3D half Fourier FSE 法を用いた撮像法や、SSFP 系を用いた撮像法、さらには選択的 IR パルスを用いて 3D half Fourier FSE 法や SSFP 系シーケンスで収集を行う Time-Slip(Time-Spatial Labeling Pulse)法などが登場し多くの研究発表がなされている。

今回は、非造影 MRA として代表的な TOF 法と PC 法について

大館市立総合病院の 工藤 淳 さん
鹿角組合総合病院の 川又 渉 さん
に演者をお願いしました。

お二人には原理からファントムを用いた基礎実験を通して、臨床における問題点（限界点）適応部位、撮像時のポイント等についてまとめていただきました。

FBI 法や SSFP 法、Time-Slip 法などは、比較的新しい装置でなければできないこともあり、そういった意味では今回の TOF 法と PC 法は、どの装置でも撮像可能であり MRI を担当されている方であれば一度は撮影したことがあると思います。

今回よりテクニカルミーティングの座長を引き受けることとなり、不慣れなために会員の皆様にはご迷惑をかけるかと思いますが、当日は会場の皆様の力をお借りしながら、ディスカッションが盛会になるよう務めていきたいと思っております。